

平成 29 年 12 月 4 日（月）

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 Kavli IPMU との情報交換会

1, Kavli IPMU のアーティスト・イン・レジデンス

東京大学 Kavli IPMU¹の坪井あや氏と、機構本部の高祖歩美氏が来館されました。Kavli IPMU では 2015 年よりアーティスト・イン・レジデンスを行っておられ、同じくレジデンスプログラムを行っている当館との情報交換を行いました。

Kavli IPMU のプログラムは、サイエンスとアートの交流の例があまりないのではないかという坪井氏の問題意識から始まり、アーティストを 4 週間（あるいは 2 週間×2 回）招致し、その滞在期間中に研究者との交流を図りながら作品制作を行い、作品を公開するというものだそうです。

2, ないじえる芸術共創ラボとの違い

2 つの取り組みの大きな違いは大きく 2 つあるようです。

① 資金と期間

ないじえる芸術共創ラボは、文化庁からの委託事業であり、資金をいただいております、そこから謝礼をお支払いしたり、イベントの費

用に充てたりしています。一方で、Kavli IPMU では資金がなく、アーティストの滞在費などは自己負担、イベント時の経費は有志で補っているそうです。

また、ないじえるではアーティスト／トランスレーター²の招致期間を一年としています。Kavli IPMU では 1 ヶ月間と短く、その間の成果物を公開するところまでを条件に、アーティストの招致を行っているそうです。

そのため、ゴールの目標や、それまでの成果アウトプットに対する考え方、外部から求められることなどに違いがあるように思われました。



¹ 東京大学国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構

平成 29 年 12 月 4 日（月）

Kavli IPMU の短期間での成果（作品）を完成形とするのではなく、その後継続して公開する場を設けることにより、制作の課程を楽しめるようにするという考え方は、短期目標と長期目標を上手に組み合わせている例として大変参考になりました。

②研究者の関わり方

Kavli IPMU では、教員全体でアーティストと関わる機会を設けるような企画があるとうかがいました。

たとえば、アーティストの作業空間を訪問したり、一緒に作品を創るワークショップ等があるそうです。

勿論一朝一夕でそのような構造ができたわけではなく、元々毎日教員全員が集まり情報交換を行うティータイムが設定されており、コミュニケーションを行う素地があったこと、ワークショップ等のイベントの際は、教員全体に周知されていること等、環境や工夫の在り方が耳新しく感じられました。

国文研では今のところ、限られた教員のみがアーティスト／トランスレータと関わっている状態なので、相互に関わり合いを持つ機会をもっとひろげてゆきたいと考えました。

3, Kavli IPMU からの学び

最も大きな気づきは、双方向性の大切さです。

Kavli IPMU でのレジデンスプログラムの根底にあるのは、アー

ティストとサイエンティスト、一見離れている現場の人が出会いを重視し、そして接点を見付け、違いを知るという考えです。そのために、アーティストにサイエンティストの現場を見てもらい、逆も行うことで、〈創る〉現場を共有するようプログラムを組んでおられるとうかがいました。

たしかに限られた時間だと、どちらか一方からの働きかけになりがちです。アーティストや翻訳者の 4 名の方が次回来館された折には、積極的に感想や質問をうかがい、対話の時間を作るよう心掛けたいと考えました。

ないじえる芸術共創ラボの取り組みは、始動したばかりで、有機的なしくみをつくりながら進めてゆく必要があります。プログラムを通して目指していることを達成するための様々な仕掛けを具体的にうかがうことで、今まで見過ごしがちだった事柄に気づくことができ、大変有益な時間となりました。